

### 「比較史的アプローチによる近代アイルランド」プロジェクト研究会報告要旨集：18世紀アイルランドにおけるシヴィック・ヒューマニズムの系譜と古来の国制論の形成：ジョン・トーランドの思想におけるヨーロッパ・ブリテン・アイルランド

GOTO, Hiroko / 後藤, 浩子

---

(出版者 / Publisher)

Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University / 法政大学比較経済研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

比較経済研究所ワーキングペーパー / 比較経済研究所ワーキングペーパー

(巻 / Volume)

125

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2005-04-20

比較史的アプローチによる近代アイルランド シリーズ No. 2

「比較史的アプローチによる近代アイルランド」プロジェクト  
研究会報告要旨集

後藤 浩子（編）

## 「比較史的アプローチによる近代アイルランド」 プロジェクトの活動概要

### 1. プロジェクトのねらいと成果

本プロジェクトは、アイルランド史をイギリス、アメリカそしてヨーロッパとの同時代的関係において捉えなおしてみようという企図のもとに集った日本のアイルランド史研究者によって遂行された。各国史、つまりナショナル・ヒストリーを超える視座からアイルランド史を見る必要をメンバー達に痛感させたのは、日本のアイルランド史研究者が長らくお世話になってきたダブリン大学トリニティ・カレッジのL・M・カレン教授による「比較史」的アプローチの提唱であった。このような理由もあって、本プロジェクトのそもそもの発端であった日本アイルランド協会主催の2002年度アイルランド研究年次大会シンポジウムの際には「なぜ、いまアイルランド史か——イギリス、ヨーロッパ・世界」というテーマであったものを、比較研プロジェクトとして続行する際に「比較史的アプローチによる近代アイルランド」に変更させて頂いた。また、プロジェクト開始にあたっては、カレン教授を招き、「比較史とは何か」を検討する研究会を開催した。（そこでのカレン教授の講演は比較経済研究所ワーキングペーパーNo.120に掲載されている。）

イギリス、アメリカ、ヨーロッパの影響を考慮することは、とりわけ、アイルランド史においては重要な意味をもつ。というのは、「イギリス」という国家はそもそも、たんなるイングランドの拡大版ではなく、それぞれが歴史的個性をもつイギリス諸島の諸地域、すなわち、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド／北アイルランドによって——そして一時期は北米植民地さえも含んで——構成されてきた複合的国家だからである。したがって、イギリス史は、後三者がイングランドによる支配を受けたという一方的関係ではなく、それぞれの双方向的相互作用のプロセスとして捉えられる必要があり、そのためには、アイルランド史もまた、イギリス諸島史—イギリス帝国史—ヨーロッパ世界史という重層関係の中で展開されるものとして理解されなければならない。

以上のような「大志」を懐いて、プロジェクト・メンバーは過去2年間に10回の研究会を重ねてきた。その成果をまとめたものが本ワーキングペーパーだが、以下に続く報告要旨集は、プロジェクト報告書の性格を兼ねていることもあり、編年史的ではなく報告順の編集にさせて頂いた。したがって、時系列の流れを捉えにくいのではという懸念がもたれるが、各メンバーによる個々の史実の分析は、対イングランド、スコットランド、あるいは対アメリカ、ヨーロッパ関係とその影響をはっきりと抽出しており、「ナショナル・ヒストリーを超える」という本プロジェクトの狙いは多少なりとも達成できたかと思われる。

プロジェクト責任者  
後藤 浩子  
(法政大学経済学部)

## 第1回研究会

日時： 2003年6月28日（土）法政大学市ヶ谷キャンパスBT19階D会議室

報告者： 後藤 浩子（法政大学）

テーマ： 「18世紀アイルランドにおけるシヴィック・ヒューマニズムの系譜と古来の国制論の形成—ジョン・トーランドの思想におけるヨーロッパ・ブリテン・アイルランド—」

コメンテーター： 山本 正（大阪経済大学）

### 【報告要旨】

18世紀アイルランドにおけるシヴィック・ヒューマニズムの系譜と古来の国制論の形成—ジョン・トーランドの思想におけるヨーロッパ・ブリテン・アイルランド—

後藤 浩子

17、18世紀のブリテン諸島における共和主義思想形成に関する従来の研究では、もっぱらイングランドの側から解釈された政治環境が議論の前提にされることが多かった。つまり、ステュアート絶対王政、ピューリタン革命、王政復古、名誉革命、ハノーヴァー朝成立という一連の事態が、イングランド議会对王権という対立軸を基にした狭い枠組みの中で捉えられ、複合君主制国家としてのステュアート朝多元王国がもつ構造上の軋みとしては捉えられてこなかったのである。多元王国であるという認識の欠如は、とりわけ、王権が持っていた多面的な意味の看過に帰着してきた。少なくとも、アイルランドの文脈において言えるのは、ステュアート朝下において王権は、イングランドに対するアイルランドの独立性を主張する際の論拠であったし、具体的な政治過程においては、王権はイングランド議会とアイルランドとの間の緩衝剤として機能していたということである。そして、さらに留意すべき点は、18世紀に入りイングランドで議会が優位を占めるに連れ、アイルランド王権は事実上、国王本人ではなく、イングランドの行政府や議会の意向を代弁するアイルランド総督によって執行されるようになった点である。これによって、ステュアート朝下とは違った枠組みで、新たにイングランドへの従属問題が18世紀を通してアイルランドでは語られるようになる。

思想史的分析が明らかにするのは、合邦の問題は、たんにブリテン政府の利他的な対処療法的措置の結果として片づけられるものではなく、むしろ、ステュアート朝三王国体制崩壊後のブリテン諸島をどのような政治体制によって維持してゆくべきかという18世紀を通じた試行錯誤の一過程として、言い換えれば複数の国制理念の選択肢の間での揺れ動きとして、再考されなければならないという点である。「古来の国制」論、二重王政論、シヴィック・ヒューマニズムの要素が様々な形で混交されることで、複数の国制理念が作り出されたのが18世紀という時代であった。そして、このような分析枠を用いて、アイルランドにおける政治的言説の系譜的流れを見ていくと、二つの分岐した流れがあることに気づく。一方は、「古来の国制」論と二重王政論に基づいて最終的にアイルランドの独立性

を主張し、古来の国制を再興しようとするものであり、他方は、シヴィック・ヒューマニズムの語彙によって新しく拡大・統合された政治体を形成する可能性を模索するものである。前者の言説は、従来「ナショナリズム」として捉えられ、後者は「ユニオニズム」と評されてきたが、両者は決して線分上の両極に布置されるような違いではなく、そもそもは政治体制変革要求の理由づけの違いにすぎなかった。それが18世紀後半には、前者は抵抗の言語として、後者は拡大する統治の言語として機能するようになる。例えば、17世紀末に後者の言説の流れを準備した代表的人物であるジョン・トーランドやロバート・モールズワースの言説は、政治がもつ既存の領域性をうち破っていく普遍性をもち、それゆえ、一世紀後には「ユニオニズム」に借用され、また大西洋を越えて伸張したイギリス帝国のプロテスタンティズムの基盤作りにも貢献することとなったのである。このようなトーランドやモールズワースの思想の特色こそ、彼らがイングランドの思想史ではかなり重要な位置を占めてきたにもかかわらず、19世紀以降のアイルランドではほとんど注目されてこなかった理由でもある。だが、彼らのブリテン政府への結果的貢献は彼ら自身の本来の意図ではなかった。そもそも彼らが模索したのは、名誉革命後、ステュアート朝三王国体制よりもより安定した政治体制をブリテン諸島に構築することであり、この政治体制の一分枝として、アイルランドに新しいプロテスタント国家を建設することだったのである。

トーランドは、ステュアート朝からハノーヴァー朝への移行をグレート・ブリテンの国制の優れた本質の表現であるとして積極的に是認した。彼は、世襲制に加え自由民による選挙制をヨーロッパにおける王政の伝統として位置づけた上で、後者によって選ばれた者として、ハノーヴァー朝の王を理解した。さらに、トーランドは、プロテスタンティズムを基底にして新しく創造されるべきものとしての「ブリテン」の政体を構想し、統一によるブリテンの新しい政体への賞賛と期待をその著作に記した。「連邦主義的合邦論 *federal unionism*」として特徴づけられるこのような統一政体の構築への志向は、スコットランド共和主義にその源流をもつ。18世紀初頭に、スコットランドやアイルランドの共和主義者がステュアート朝三王国体制に代わるものとして構想したのは、イングランド、スコットランド、アイルランドの各議会の連合体制であり、この連邦主義的合邦論は、イングランドへの同化・吸収の支持としてのみ捉えられてきた合邦論とは一線を画すものである。そこでは、ブリテンは出自や国籍を超えた普遍的政治体、すなわちコモンウェルス＝リパブリックとして構想されたのだが、しかし、そこには一つの不可欠の前提があった。すなわち、政治的国民たる資格としての「プロテスタンティズム」であった。そして、1689年以降うち続くブリテンの対仏戦争を通して、カトリックという「他者」として具現化されたフランスとの対比において、プロテスタンティズムは「ブリティッシュネス」の基底的要素となっていった。ある意味で、トーランドの共和主義は、自由の名の下に拡大する「プロテスタント」帝国の普遍的政治体を語る言語を提供したといえるだろう。

アイルランドにおける影響力という点から見れば、トーランド思想は、ダブリンの国教徒プロテスタントを基盤とする主流派の古来の国制論の中に一要素として取り込まれることはなかった。しかし、トーランド思想の系譜的伝播の過程は、少なくとも、アルスターの非国教徒プレスビテリアンの共和主義的ラディカリズムの思想的源泉にはなり得たことを示している。